

相模国における織豊系城郭

―石垣山一夜城の教材化へ向けて―

湘南台高校 武井 勝

一 はじめに

現行学習指導要領「日本史B」の大項目「歴史の考察」は、「様々な歴史的資料の特性」に着目することや、「地域の文化遺産」についての関心を高めること、「地域社会の歴史と文化」について、自然条件や政治的、経済的な諸条件と関連付けて考察させること、などを学習のねらいとしている。報告者は以前から、これらの主旨を生かせる教材として地域の城郭資料に着目し、その教材化や授業実践に取り組んできた。例えば、「足柄地方の中世城館」と題して特定地域の城郭分布の特徴から地域の政治・社会の動きを考察させる主題学習を試みたり、「幕末期の台場と海防政策」という単元を設定し、神奈川台場などの台場築城を欧米諸国のアジア進出と関連付けて追究する授業を実施してきた。

本報告では、このような城郭資料の教材化の一環として、中世から近世への移行期に、相模国の織豊系城郭として築城された石垣山一夜城（以下、石垣山城）を取り上げた。まず、織豊系城郭の特性について整理し、次に、石垣山城に関する調査・研究成果を踏まえて、石垣山城の築城過程や背景を究明した。これらをもとにして、織豊系城郭としての石垣山城築城の歴史的意義について、豊臣政権の天下統一事業と関連付けて考察するとともに、教材化へ向けての課題についても整理した。

二 織豊系城郭の特性

織豊系城郭とは、織田信長（以下信長）、豊臣秀吉（以下秀吉）及び織豊系大名によつて築城された城郭の総称であり、中世城郭から近世城郭へ移行する過渡期の城郭である。日本史Bの教科書には「桃山文化を象徴するのが城郭建築である。この時代の城郭は平地につくられ、重層の天守閣を持つ本丸をはじめ、石垣できずかれ、土塁や濠で囲まれた複数の郭を持つようになった。安土城や大坂城・伏見城などは、天下統一の勢威を示す雄大・華麗なもので、：」（『詳説日本史』山川出版社）と記述されている。この十数年間、主に考古学の立場からの織豊系城郭に関する研究が進んでおり、大きな成果を挙げている。それによると、織豊系城郭を特徴づけるものは石垣、天守などの礎石建物、瓦葺きという三つの要素で、その画期は安土築城にあるとする。

そのうち石垣については、一五五六（弘治二）年に六角義賢が改修した観音寺城から導入されるが、一五七六（天正四）年築城の安土城をはじめとする織田氏系列の城郭で本格化したものと考えられている。その背景には、中世以来、近江比叡山の各寺院の建築に携わり、後世「穴太衆」と称せられた専門の石工職人を組織化できたことがある。城郭への石垣の導入により、鉄砲の攻撃を防ぐための重量建造物の構築が容易になり、横堀に替わって曲輪を囲い込む防御ラインが強化され、城の出入り口である虎口やその空間である枡形の防御機能が高められるなど、城郭構造に変化がもたらされた。

礎石建物には、多聞櫓などの櫓建築も多くみられるが、その中心となるのは天守という高層建築である。天守の先駆的事例としては、一五六〇（永祿三）年に松永久秀が築城した多聞城の「四階ヤクラ」

や一五六九（永祿十二）年に織田信長が築いた旧二条城の「坤角三重櫓」、一五七一（元龜三）年の坂本城の「大天主」「小天主」及び同年に細川藤孝により改修された勝龍寺城の「殿主」が挙げられる。そして、一五七六（天正四）年に信長により安土城が築城され、その中心に五層七重の「天主」という高層建築が出現し、織豊系城郭の象徴となった。

瓦については、加藤埋文氏の金箔瓦の出現と伝播に関する研究などから、天守などの高層建築に瓦を葺くこと自体に強い政治的意図が働いていた、ということが明らかとなった。それによると金箔瓦は、信長の時期には安土城と、二人の息子の居城、すなわち織田信雄の松ヶ島城（三重県松阪市）、織田信孝の神戸城（三重県鈴鹿市）のみで確認されているに過ぎない。それが秀吉段階になると、豊臣姓・羽柴姓を下賜された一家一門の城郭、関東の家康領に接する城郭及び朝鮮出兵の本営である名護屋城への道筋の諸城からも、金箔瓦が出土しているのである。そのことから、秀吉は天守に金箔瓦を葺いた城郭を全国の拠点に配置することで、政権の威信を示したものと考えられている。

以上のように石垣・礎石建物・瓦の三要素を導入して成立した織豊系城郭は、中世城郭と異なる性質をもつことが理解できる。中世城郭が「戦うための城」であるのに対し、織豊系城郭の本質は、「見せるための城」なのである。こうした織豊系城郭が築城された背景には、畿内地域で古代から大寺社を中心に継承されてきた高い技術力を編成し直すことができた、織豊政権の強力な支配体制がある。その意味では、織豊系城郭とは織豊政権の政治理念を具現化した城郭として捉えることができる。

三 石垣山城の概要

石垣山城は、一五九〇（天正十八）年、豊臣秀吉（以下、秀吉）の小田原攻めの際に本営として築かれた陣城で、一夜にして築かれたという伝説で知られている。箱根外輪山から早川に沿って北北東に延びる標高約二四〇mの尾根上に立地し、小田原城からは直線で3kmの距離にある。現在の石垣山城は、国指定史跡として整備されており、築城当時の石垣や縄張りを観察することができる。また、測量調査や部分的ではあるが発掘調査も実施されている。石垣山城の最大の特徴は、当時の関東にはみられなかった総石垣の造りにある。石垣の形態は、自然石を割って積み上げ、そのすき間に小石を詰め込んだ野面積みであり、南曲輪南面の隅角部の積み方には、算木積の技法がみられる。特に井戸曲輪の石垣や石墨は、一見して野面積みの形式としては極めて完成度の高い水準に達していることを観察することができる。こうした石垣の構築には、一五八〇（天正十八）年七月十一日付けの豊臣秀吉朱印状に「穴太三拾五人被返遣候、：：」とあることから、「穴太衆」と呼ばれる近江の石工職人が関わっていたことが推測できる。

石垣山城の縄張りについては、一七二〇（享保五）年作成の絵図『大岡御陣城相州石垣山古城跡』（以下、古絵図）や測量調査、発掘調査の成果などから次のことを確認できる（図1）。現時点で遺構が確認できる範囲は、出城から北曲輪までの南北約五五〇m、東西二七五m内である。その中に基本的な曲輪配置として、南北方向の尾根を軸にその最高地点に本城曲輪と天守台、その南に西曲輪と大堀切を隔てて出城、北に馬屋曲輪や北曲輪、井戸曲輪などが位置し、本城曲輪の東に南曲輪などの小規模な曲輪群が存在する。城道は、

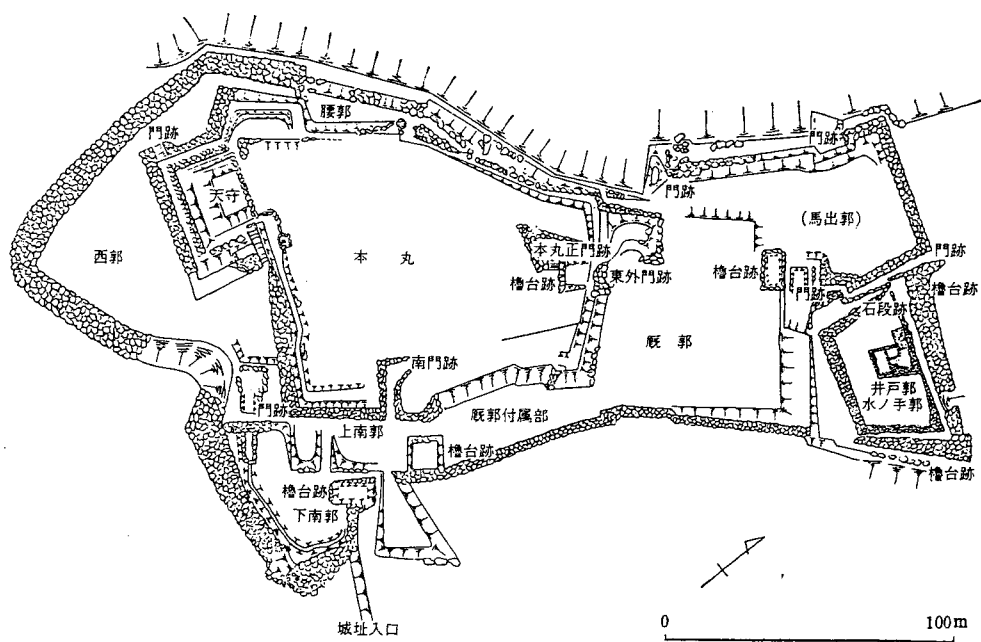


図1 石垣山城縄張図 (田代 1980年より)

井戸曲輪の北方から馬屋曲輪を通って本城曲輪へ至るルートと、南曲輪から本城曲輪へ至る東口ルートの二筋が確認でき、城内の通路には桁形構造を持つ門が設置されていたことが推定されている。大手口の位置については、井戸曲輪がある北口を大手口とする説も提起されているが、古絵図の記述や『小田原市史』別編(城郭)での指摘通り、箱根湯本から早川に至る、いわゆる関白道に東側で接する東口を大手口とするのが妥当だと考える。ちなみに古絵図では、東口城道を「大手口道幅八間」、南曲輪の北東隅櫓台跡(中門)を「大手門跡、道幅四間」及び北口の井戸曲輪の西側帯曲輪先端部を「裏門跡」と記述している。

また、一九八八年度から一九九〇年度にかけて断続的に実施された測量調査や部分的な発掘調査などからは、次のような知見が得られている。すなわち、門跡とみられる地形や西曲輪南西端や南曲輪北端に櫓台らしい痕跡が確認されたこと、石垣に使用されている石は安山岩で付近から容易に採取できる石であること、天守台や櫓台跡周辺からは、軒平瓦一点、丸瓦片十五点、平瓦片五〇点の計六六点の瓦が出土しており、瓦葺きの本格的な天守や櫓の存在が推測できること、及びこれらの調査の過程で天守台とその周辺部を中心に総数約二千四百点の瓦片が採集され、その中に「天正十九年」の銘をもつ平瓦片が確認されたこと、などである。これらのことから、石垣山城は、石垣・礎石建物・瓦を特徴とする織豊系城郭であることを知ることができる。

四 石垣山城築城の過程と背景

秀吉は一五八九(天正十七)年十一月二四日、「惣無事令」に基

づき、後北条氏の討伐を布告した。周到な準備を整え終えると、翌一五九〇（天正十八）年二月には、秀吉方の軍勢が家康の分国駿河東部に集結し、後北条氏と相對することとなった。同年三月一日には、秀吉自らが京を出発、途中山中城など後北条氏の前線の諸城を攻略し、小田原城包囲の態勢がほぼ整った四月六日、箱根湯本の早雲寺に本陣を布いた。その前後に石垣山城の築城に着手したものと考えられるが、正確な築城開始日については明らかではない。

石垣山城の築城に関しては、一夜にして完成させ、後北条方を驚かせたという伝承があるが、実際には八〇日余を費やして完成した本格的な城郭であることは、以下の各史料から明らかである。一五九〇（天正十八）年卯月二十八日の芝山宗勝の書状には「御座所もはや石くみも、御てんも、らい月にハいてき候はんま、やかて御かいちんなされ候はんとの事候、たいりやく七月中にハ、御かいちんにて候へく候、……」（『五島慶太氏所蔵文書』「神奈川県史」資料編三）と、秀吉の御座所である石垣山城は、石垣、御殿とも五月中には完成し、七月中には開陣する見通しであると記されている。しかし、『伊達日記』によると、伊達政宗が秀吉の下に参陣した六月九日段階では「小田原御陣所ニ石垣御普請被成候半ニ」（『伊達日記中』「群書類従」二二号 卷三九〇）と、石垣の普請は終了しておらず、六月二十日の古田織部宛千宗易の書状でも「関白様被仰付候御城も、漸當月出来にて候、然者還御あるへく候哉」（『東京国立博物館所蔵文書』桑田忠親「定本千利休の書簡」所収）と、六月中の完成を報告している。そして、徳川家康（以下、家康）の家臣である松平家忠の日記の「廿六日、丙申、関白様石かけの御城へ御うつり候、……」（『続史料大成』「家忠日記」二）という記述から、

六月二六日に秀吉は石垣山城に移ったことが確認できる。このように、石垣山城は、四月六日前後の普請開始から六月下旬までの約八〇日余を費やして築城されたのである。

それでは「石垣一夜城」という名の由来ともなった一夜城伝説とは、どういうものなのであるか。家康の誕生から一六一六年の死に至るまでの事蹟を詳述した『大三川志』には次のような記述がある。「……北條ノ老臣松田憲秀嚮ニ秀吉へ密ニ通ジ居ケルガ、又密ニ秀吉へ告テ曰、小田原城ノ西南ニ當テ笠懸山ト云フ高山アリ、最嶮岨ノ地ナリ、是ニ登テ望メバ城中眼下ニアリ、箱根山ノ此方ヨリ樵夫ノ問道アリ、殿下此山ヲ本陣トナサバ城兵大ニ計ヲ失ハン、我レ時ヲ伺ヒ事ヲ通ジ内應メ城ヲ陷サン、秀吉喜ビ使ヲ返シ人ヲメ笠懸山ノ地理ヲ見セシム、返リ報ズルニ松田ガ告ルニ違ハズ、秀吉湯本ノ真覺寺ニ屯メ、笠懸山ニ人夫ヲ遣ハシ、樹木ヲ斬リ陣營ヲ構へ、長六尺ノ籠ヲ組マセ石ヲ納レ、是ヲ積テ石壁トナシ櫓ヲ設ケ、悉ク白紙ヲ以テ塀矢倉ヲ張り、經營畢テ小田原城ヲ遮ル大樹ヲ盡ク斬ル、小田原城中ヨリ是ヲ見、笠懸山ニ附城一夜ニ成就セルニ驚ク、秀吉笠懸山ノ陣城ニ移ル、……」（『国会図書館蔵』「大三川志」卷之二十四）である。また、『北条記』（関白勢圍小田原事）にも「……卯月朔日より人数を石垣山の松森の間へ上げ陣屋を作り、矢倉を上げ、四方の壁を杉原紙にて張しかば、一夜の中に白壁の屋形が出来る。さて普請出来ければ、関白陣屋へ御移りあり。面向の松の枝とも切りすかしければ、小田原勢肝をつぶし、こはかの関白は天狗か神か。かやうに一夜の中に見事なる屋形出来けるぞや、と松田が教へたるとは夢にも知らず、諸人恐怖の思をなすも理なり」（『北条史料集』所収）とある。これらと類似した記述は『関八州古戦録』にもあり、

これらからは後北条氏の老臣松田尾張守憲秀が秀吉に内通し、憲秀が当時笠懸山などと呼ばれていた石垣山を本陣として城中を俯瞰する策をすすめたこと、陣営の前面に杉原紙を張り白壁のように見せ、ある日前面の樹木を切り払うことで、一夜にして城が完成したように見せたこと、その結果、後北条方は一夜のうちに巨城が山上にそびえ立っているのを見て恐れた、とういうことを知ることができる。さらに石垣山城の規模については、秀吉が五月二十日に浅野長政と木村常陸介に宛てた書状の「御座所之御普請を、彼夜番・日番を仕候人数被仰付、磊重、二つかせられ候て、聚楽又ハ大坂の普請を数年させられ候ニ不相劣様ニ、被思食候、……」〔浅野文書〕「神奈川県史」資料編三」という記述などから、聚楽第や大坂城の普請と同規模の本格的な織豊系城郭であったことが想像できる。後北条方が一夜のうちに豪華絢爛な白亜の巨城が山上にそびえ立つのを見て戦意を喪失した、という一夜城の伝承は、石垣山城が「見せるための城」という特徴を持つ織豊系城郭として、小田原城に籠もる後北条勢に対して優位に立ち、戦意を喪失させるために築城されたことを如実に示すものである。

五 石垣山城築城の意義

小田原平定後の石垣山城の歴史については、一八四二（天保十三）年に完成したという江戸幕府官撰の地誌『新編相模国風土記稿』足柄下郡早川庄の「石垣山」や「豊臣秀吉陣所跡」に関する記述（『新編相模国風土記稿』巻之三十一）からは、次のことが確認できる。すなわち一八四二（天保十三）年当時、石垣山城周辺は「要害山」として小田原城主の管理下にあり、立ち入りが禁止されていた

こと、秀吉は小田原平定後の七月一四日に奥州仕置きのために石垣山城を出発、八月十七日に石垣山城に戻っていること、そこで家康の家臣大久保忠世の饗応を受け、八月二二日に石垣山城を出発して駿府へ引き返していること、などである。また、一八四〇年代に小田原藩士三浦義方が著した『相中雜志』には、「大久保家元祖覚書二云：小田原落城シケレハ、秀吉ハ奥州ヘ下ラレ、ソノカヘリニ小田原石垣山ノ城ヘ入、七郎右エ門ヲヨヒ、コノ城ヲ其方ニ渡スト念頃ニイハレ」〔相中雜志』智編二四）という記述もみられ、石垣山城は小田原城主となった大久保忠世に与えられたことが推測できる。但し、その年代については明らかではない。

小田原平定後の石垣山城は、秀吉の陣城としての役割を終え、家康の重臣で小田原城主となった大久保忠世に引き継がれ、代々の小田原城主が管理することになった。しかし、前述したように一九九〇年度の調査で採集された「天正十九年」銘を持つ瓦片と、一九六一年に久保田正男氏が天守台跡から採集した「辛卯八月日」銘の文字瓦は（写真1・図2）、石垣山城が小田原攻めの陣城としてだけではなく、小田原平定後も何らかの役割を果たしたことを想起させる。「辛卯八月日」は一五九一（天正十九）年あたり、この二片の瓦は小田原平定後の一五九一（天正十九）年段階でも、石垣山城では瓦葺き建物の作事が継続されたことを示すものである。それでは、石垣山城の築城が継続された理由は何であろうか。今のところ、それを明確にすることができるとは文獻史料や考古学資料などは存在しないが、秀吉の城郭政策や天下統一政策と関連付けて考えることで、その理由を推測することができる。例えば、『小田原市史（城郭編）』では、小田原平定後に関東を領することになった家康に対して優位



写真1「辛卯八月日」銘平瓦
(小田原市教育委員会より提供)

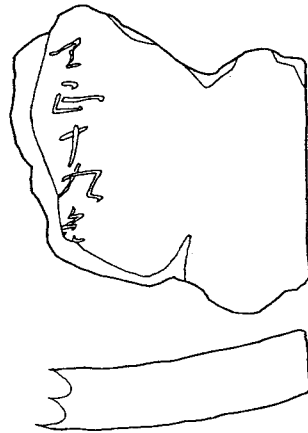


図2「天正十九年」銘平瓦
(小田原市教委 1993年より)

性を示すために瓦葺き建物の建築を継続したと推論している。その論拠は、家康の関東移封後、秀吉により家康旧領の主要城郭の改修がなされるが、これらの諸城では一五九一（天正十九）年頃から瓦葺き建築が顕著であることと、織豊系城郭における金箔瓦の使用との関わりからである。特に後者については、前述したように、関東の家康領に接する沼田城、上田城、松本城、小諸城、甲府城などから金箔瓦が出土している。現段階では石垣山城からの金箔瓦の出土は報告されていないが、朝鮮出兵のための陣城であった名護屋城からも金箔瓦は出土しており、今後の調査で金箔瓦が出土する可能性もある。一方、金箔瓦が出土しないのではなく、使用されていなかったということになると、一五九一（天正十八）年以降の作事の継続は秀吉ではなく、大久保氏によって行われた可能性も考えられる。前記した『相中雑志』などの記述からは、小田原平定直後に、石垣山城は小田原城とともに大久保忠世に委ねられた可能性が高い。そうなると、徳川氏に対し優位性を示す象徴としての城を、家康の家臣に預けたことになるのだが、この点について、『小田原市史（城郭編）』では、「絶妙な政略性を含んだもので、その意味では石垣山城はきわめて微妙な扱いのもとに存続したことになろう」と結論づけている。

それ以外にも、石垣山城の築城を小田原平定後に着手した奥州平定（奥州仕置）や名護屋城築城と関連付けて考えることも必要であろう。特に前者については、奥州の諸大名にとっては、小田原参陣が領主権を認められる条件の一つであり、奥州の領主の多くが一五九〇（天正十八）年五月から七月初めにかけて小田原に参陣している。その際秀吉は石垣山城で奥州の諸大名を謁見しており、『伊

達政宗言行録―木村宇右衛門覚書―には、秀吉は織豊系城郭の「見せるための城」という本質を生かしながら、伊達政宗をはじめとする奥州の諸大名に威信を示したことを反映するエピソードがみられる。また、奥州平定が完了したのは、九戸政実の反乱が鎮圧された一五九一（天正十九）年九月のことであり、この年まで石垣山城の築城が継続されたとしても不思議なことではない。この点については、今後も引き続き追究していきたい。

おわりに

一五九〇（天正十八）年に築城された石垣山城は、小田原攻めにおける一夜城の伝承だけがクローズアップされているが、関東以東で最初の織豊系城郭であった。小田原攻めの陣城としてだけではなく、関東の家康領国や奥州に対して、豊臣政権の威信を示す機能や役割も期待されて築城されたのであろう。こうした石垣山城築城の意義をより明確にするためには、豊臣政権の性格や諸政策と関連付けて考察することが重要であるとともに、秀吉の城郭に対する考え方について検討していくことも必要ではないだろうか。この点についても今後の課題としていきたい。

石垣山城の教材化に関しては、今まで報告者が取り組んできた課題の一つに、個別城郭をわが国の歴史の展開にどのように位置づけていくか、ということがあった。この点、石垣山城については、その機能や役割を豊臣政権の統一事業と関連付けて追究させることが容易であり、課題解決学習などを通して学習効果も期待できると考える。また、実際に城郭資料を活用した授業を実施する際には、次の点に留意したい。第一は「縄張り」、「虎口」、「曲輪・郭」、「普請」

「作事」など独特な城郭用語をいかに分かりやすく説明するか、ということである。例えば、スライド資料にして視覚的に理解させるなどの工夫が必要である。第二は、城郭資料を所有する地域の博物館、資料館、文化財担当部署などとの連携の推進である。資料の提供に留まらず、今後は教員と学芸員との学習プログラムの共同開発、学芸員による出前授業などを志向することも重要であると考えられる。

〈主な参考文献〉

- 小田原市『小田原市史』別編 城郭 一九九五
小田原市教育委員会『史跡石垣山Ⅰ―一九八八年度測量調査報告―』
・『史跡石垣山Ⅱ―一九八九年度詳細分布調査報告―』・『史跡石垣山Ⅲ―一九九〇年度詳細分布調査―』小田原市文化財調査報告書第三五・三八・四四集 一九九一・一九九二・一九九三年
田代道彌『石垣山一夜城』『日本城郭大系』第6巻 新人物往来社 一九八〇
中井 均『織豊系城郭の画期―礎石建物・瓦・石垣の出現―』『中世城郭研究論集』 新人物往来社 一九八〇
中井 均『城郭にみる石垣・瓦・礎石建物』 高志書院 二〇〇三
『戦国時代の考古学』 村田修三『図説中世城郭事典 第一巻』新人物往来社 一九八七